

江別市自治基本条例セミナー

日時：平成23年2月26日(土) 13:20～15:00

場所：野幌公民館ホール

講師：坂本 純科 氏 (NPO 法人 人まち育て I&I 理事長)

テーマ『コミュニティガーデンによる協働のまちづくり

～自治基本条例と「まちづくり」のつながり』

講演： みなさんこんにちは。年度末の大変お忙しい中、来ていただいてどうもありがとうございます。私は只今ご紹介していただいた、NPO 法人人まち育て I (アイ) & I (アイ) という団体の理事長をしている坂本純科です。「I&I (アイアンドアイ)」は英語の頭文字をとっていますが、どういう意味かということ、最初の一步を応援する、というような意味です。市民活動をこれからはじめたいという個人やグループ、あるいは市民活動団体と協働したい企業や行政のみなさんからご相談を受けて色々な企画を行うため、専門分野ごとに毎回違ったチームでお手伝いをする、というような活動をしています。

私は札幌市役所で13年間、環境行政に携わっていて、公園の設計をしたり、街路樹を植えたりとか、当時先駆けて市民参加のまちづくりということをやって参りました。本当にこれからの時代は予算的、財源的な問題もございますけれども、実際に住んでいる方、日ごろ公園を使ったり、大切にしている市民の皆さんと一緒にやらなければ、まちづくりというのは実現しないのだなと、当時は行政職員の立場で実感していました。2004年に退職して、イギリスのウェールズというところに留学しているのですが、そこで地球環境問題を学びながら、とはいえ大学院の授業はおもしろくなかったので、いろんな市民団体の活動に実際に参加して、NPO 先進地のヨーロッパでは市民と行政がどんな風にやっているのかというのを見て参りました。というのも、市役所を辞めて NPO の活動だけで食べていくのはなかなか難しいと思っていた矢先で、先進地のイギリスの事例を見に行きたかったこと、それから環境問題というのは環境だけ取り上げて解決するというのは非常に難しく、いろいろな福祉ですとか教育ですとか他の分野のテーマと一緒に解決していかなければならないのだなと思っていたところ、ウェールズで当時始まっていたトランジションタウンという市民環境運動に出会いました。今日はみなさん、自治基本条例と地球環境問題とどんな関係があるの?とか、温暖化問題とまちづくりってどういう風に結びつくの?と思いながら聞いている方

がいらっしゃると思いますが、ちゃんと最後はつながっているのでお聞きいただきたいと思います。

トランジションタウンとの出会い

ちなみにこの中でウェールズってどこにあるかわかる方いらっしゃいますか。私のへたくそな、なんちゃってイギリス地図を書きますと、これがイギリスの島、これが北アイルランド島です。ロンドンがこの辺りにあるとすると、大体で聞いてくださいね。上の方がスコットランドで、ここら辺がウェールズ、それ以外のところをイングランドと呼んでいます。この4つが一緒になったものがユナイテッドキングダムと呼ばれています。もともとはウェールズとスコットランド、あるいはイングランドというのは文化的にも民族的にも全然ちがうのです。私達から見たら変わらないですよ。食べているものも変わらないです。だけど言葉も全然違うのです。私はウェールズの人口千人くらいしかいない小さなまちにいましたが、そこで家をシェアしていたところの高校生が、日本の大阪に交換留学に行った際に、たまたまその年はワールドカップで盛り上がっていたのです。それでみんなにイングランド強いね、ベッカムかっこいいね、と言われたらしいのですが、そのたびに彼はムカッとしていたらしいです。あれはイングランドだ、オレ達は違う、と思っていたらしいですが、残念ながら彼の日本語力とその大阪の高校生の英語力ではその違いを理解し合うのは難しかったようです。最後には彼は諦めた、と言っていましたけど。そういう意味では文化的には非常に違いがあり、歴史的にはイングランドが常に強かったらしく、例えば学校でもウェールズ語をしゃべったらダメとか一昔前まではあったそうで、ライバル意識はいまだに強いのです。ですから、じゃあ、あんた達ウェールズが負けたらどこ応援するのかと聞くと、イングランド以外。スリランカでもアルゼンチンでもどこでもいいっていうくらい。でも、政治的にはそんなにぶつかっているわけではなく、議会も別ですが、政治的経済的にはうまく連合しています。スコットランドやコーンウォール地方は自分達の特有の言語を失いつつある中、ウェールズだけは完全に二ヶ国語で授業を行い、バイリンガルとしてやっています。普段も両方喋れる。それくらい自分達の言葉を大事にしており、今の高校生くらいは理科も社会も二ヶ国語で学び、だけでも映画をみたり、テレビをみたり、雑誌を読んだりするのは英語なので完璧なバイリンガル。おじいちゃん達くらいの世代は大人になってからウェールズ語を学んだと聞いていますけれど、交通標識でも、市役所のパンフレットでも全部二ヶ国語で、全く違う言語です。もともと伝統ある民族なので誇りを持っている。そのくらい、自国の言葉にこだわった、アイデンティティの強い人達だと思っていてください。ウェールズねって言ってあげるとすごく喜ぶので、ウェールズから来た人に会う機会があればちょっと思い出していただけたらと思います。

私はこの小さな町に住みながら、地球環境問題を学んでいたのですが、それだけでは、飽きたらずに市民グループの活動にも参加していました。余談続きだなあとありますが、日本の野菜が懐かしくて、日本の野菜が食べたくて畑の一面を借りて自分で野菜を作っていました。そしたらご近所の方がめずらしがつて売ってほしいと言われました。コミュニティガーデンの活動は、公園の中でやっていたから、野菜は作ったことはあるのです。一応農学部出身ですし、全然やったことがないわけではないのですけれど、子どもとか障がいを持っている方と作ることもそのものが目的でやっている活動なので、売り物にしたことはないのです。けれど、売ってほしいと言われて、こんな田舎だから珍しいものなので、まあいいか、おもしろいから売ってみようかなと好奇心で売ってみました。結構、ローカルなオーガニックで有機の野菜だつていうと、素人が作ったものでもちゃんと買ってくれました。買ってくれるのはいいのだけれども、びっくりしたことにニラでも白菜でも大根でもごぼうでも生で食べるのですね。サラダにしてしまう。生でもおいしいですよ。でも、ちょっと火を通したらもっと美味しくなるのにと、月に1~2回ボランティアの人に参加してもらって、一緒に畑作業をするワーキングパーティーということをして、そこでちょっとした日本食を振舞うということをやっていました。日本人なんて一人しかいない、アジア人なんてまるっきり住んでいないところだったのでそんなことがきっかけで、先ほどちょっと話をしましたトランジションタウンの人達から「参加しない？」という声がかかり、参加することになりました。

トランジションタウン~持続可能なまちづくり

今日は、英語がいっぱい出てきて嫌だなと思うかもしれません。別に覚えなくてもいいのですけれど、せっかく来ていただいたので、外国のめずらしい話も聞いていただきたいと思います。コミュニティガーデンの前段は、トランジションタウンのお話をしていきたいと思います。どうやって持続可能なまちづくりを具体的に進めるか、というようなお話をしていきたいと思います。トランジションタウンとは何か。まずトランジションの英語の意味ですけれど、移行するとか変遷する、移り変わるとかとかそういう意味で、トランジット、例えばここからロンドンに行くには、香港でトランジットするとか、そこで乗り継ぐということなのですけれど、うまく乗り継いでいくことを連想していく、そういう名前の付け方なのです。移行するというからには、ある状態から別の状態に移行していくというのが前提ですよね。何から何に移行していくのか。安い石油を大量に使う、大量生産大量消費の社会から、地域をベースとしたしなやかで強い社会を目指す、ということです。しなやか、というのは河川敷にあるような柳の木が大風でびゅんびゅんふかれながら、激しく揺れるのだけど折れない。外界の変化に対してそれにうまく対応しながら生き残っていく、というのかな。そういうイメージを持

っていただけたらいいと思います。

そもそもどうして、なぜ、トランジションなのか？なぜ移行しなきゃいけないの？ということもちょっと触れたいと思います。今日のテーマと全然関係なさそうと思うかもしれませんが、一応前提として、こういう課題をもっているということを理解していただきたいと思います。トランジションの課題、双子の課題といわれている大きな課題があり、一つはピークオイル、最近ちょっと話題になり、1週間くらい前にも新聞に出たと思います。このグラフを見ていただくと、何となく連想されるのではないかと思います、オイルがピークを迎えるということです。石油の産出量がある時期にピークを向かえ、その後は減少の一途をたどるという説で、アメリカのハーバードという学者が、1950年代半ばに学会で発表したものです。当時は世界中の人が笑いました。これから科学技術がもっともっと発展して、これまで得られることはなかった油田も見つかり、このように減少していくということは誰も信じなかった。でも実際にハーバードが予測した1971年をピークにアメリカ国内の原油の産出量は減少をたどっていますし、当時、2010年説とか2030年説というのが出ていましたけれど、先日の報道でも2008年とか2006年がピークで既に我々はポストピーク時代に来ている、という報道もされています。突然ゼロになる、という話ではなく徐々に減っていくということですが、未来永劫今と同じように安い石油に頼ることはどうもできなさそうです。私達の生活スタイルは、暖房や化粧品・パソコンなどありとあらゆるものが石油を原料につくられていますし、何より私達のグローバルな経済・社会というのは海外からやってくる様々なものに支えられているということを考えると、オイルの量と私達の生活は切っても切れないと考えられます。その一番大きなものは食料ですよね。最近TTPの批准のことで国内外でも議論がされていますが、日本では今でも4割の食料を海外に頼っているわけですから、海外からの食品がどんな風になっていくのかというのは不安が大きいところです。

それから2つ目の課題、これは気候変動です。日本だと地球温暖化と紹介されることが多いですけども、ヨーロッパではもっぱら気候変動といいます。つまり、地球温暖化に伴って気候変動が起こるということですが、全体的な地球上の平均気温は上がっていきませんが、場所によって局地的には下がっていくところもあります。ヨーロッパなんかでは北極海周辺の水温が変り、それによって海流が変り、これから氷河期になるのではないかという地域も実際にあります。北海道のように冷涼な気候に住んでいる私達は暖かくなって何が悪いの？というか、もう寒いのは嫌だし、雪も嫌だし、暖かくなったらお米だって取れるし、ラッキーじゃないって私も思ったことはありましたけれども、実際にただ暖かくなっているわけではないのです。世界中のいろんなところで洪水が起こったりあるいは干ばつが起こったり、異常な規模の台風、台風は今始まったことじゃなくて昔から

ありますが、極端な気候が増えている。あるいはたった1℃変っただけで生息できない虫とか鳥とか植物がいる、そういった生態系が変わっていくというのは非常に大きくて、特に赤道直下に住んでいる貧しい国の人々にとっては死活問題だったりします。マラリアのような伝染病が増えるということも予測されています。水没してしまうようなエリアも出てくると実際に推測されています。気候変動によって被害を受ける人が地球上で年間20万人以上いるということを考えると、自分達はとりあえず平気だとしても、倫理的には大きな問題があるのではないかと思います。

ここで注意したいことは、エネルギーの問題、食料の問題、そして地球環境問題は根本が全部つながっているということが、大事な点です。どれか一つだけ科学技術で解決したからといって他の問題がなくなるわけではないということです。例えば、暖かくなったらお米がとれる地域が増えるというのは、これは本当ですが、これまで作物を栽培できていたのにできなくなるという地域も当然増えるわけですよ。いくら暖かくなったからといってすぐに農業が出来るわけではなく、準備には時間がかかります。品種改良とか土地改良とかの時間を考えますと、私達にとっても、北海道は安全という風にはなかなか言いがたいのではないかと思います。ジャパンフォーサステナビリティというNGOの枝広さんがおっしゃっていましたが、この問題というのは実は繋がっていて、問題といわれているエネルギーとか食料というのは実は問題ではなく症状なのだ、と。問題は、有限の資源に基づいて、私達が無限の成長を求めていることで、それに伴って発生しているのがこういういろんな症状で、どれか一つだけ解決するというのは不可能ではないか、とおっしゃっていました。さあ、ここでこんなすごく楽しそうな写真が出てまいりましたけれども、このように経済の成長を経て、これから下っていく、降りていくそういう時期に私達はいるのではないか。これを知らずに暮らしていつかある日クラッシュしてしまう。限られたエネルギーとか、食料とか水とか、そういった資源を求めて争いが起こったり、貧しい人が厳しい目にあったりするのではなく、徐々にこれを見越しながら移行していく。ここでやっとな移行の意味がわかったかと思いますが、この移行を指してトランジションタウンと呼んでいます。というのは、一朝一夕に目的地にいけるわけではないのです。そしてこのトランジションタウンスピリットというのが、もしかすると自治基本条例の肝に近いのではないかなと思ったので、今日はこれを紹介させていただきます。

TTスピリット（トランジションタウンスピリット）

まずはTTスピリットその1。依存から自立、共存へ。今まで食べ物や遠いところからやってきました。エネルギーもどこからかやってきました。いろんな制度や仕組みは行政がつくってくれました。だけれども、これからは食べ物もエネルギー

ギーもいろんな仕組みもできるだけ自分達でつくる、というのがスピリット1です。

スピリット2は部分から全体へ。さっきも食糧問題やエネルギー問題は繋がっているというお話をしましたが、どこか一部だけあるいは一時的な解決をしようとしても、それは根本的な解決にならないばかりか、また新たな問題を生むということがこれまでしばしばあったと思います。なので、部分的な解決ではなく全体的な解決を目指していこうというのが、TTスピリットその2です。

3番目、分断からつながりへ。実は、今でもさまざまな活動、技術の進歩があります。わたしは、ヨーロッパでは、イギリス以外にドイツだったり、フィンランドだったりと他の国々も訪ねましたが、環境先進国といわれているそういう国々でも個々の技術とか個々のプログラムだったりとかは、実は日本の方が優れていたりします。こんなのとっくにやっている、ものによっては江戸時代にやっていたというものも結構ありますが、これを実際につなげて仕組みにしているのがヨーロッパ人の上手なところだと思いました。私達はどうしてもこう、ぼつんぼつんとね、これは市役所がやること、これは町内会がやることと別れがちですけども、そういういろんな資源や既にある活動をもっとつないでいく、巻き込んでいくということが大事ではないかと思います。

4つ目、これは結構日本人にとってはチャレンジなのですけれど、トップダウンからボトムアップへ。これまでは、政治家があるいは会社であれば社長が、あるいは古くからの習慣も含めて、もうすでにお手本があって、マニュアルがあってそれをみんなに伝達して、みんな一斉にやりましょうということで進んできましたが、これからは小さな単位で、個人とか地域とか小さな単位でいろんな知恵や工夫を持ち寄る。こういう進め方がトランジションの本当の核となるスピリットです。イギリス人のやっていることって本当にいい加減だなあと思うような進め方もたくさんあるのですけれど、これだけはすごいですね。自分達で思いついたこと、発見したこと、できることっていうのをどんどんやっていって、日本的にいうと、こんなことやったらみんなに生意気だと思われないかしらとか、知りもしないくせにって笑われるんじゃないかしらとか、まずこれは役場に聞かなきゃ駄目なんじゃないかしらと思うこともどんどんやってしまう。これはすごいなあと感心した点です。

5つ目、これも割と日本人にはチャレンジかもしれないけれど、これは×、これは○という風に正解が一個の気がしてしまうのですよね。そうなるとうちもコントロールしたくなる。ジャッジをしたくなってしまうんですが、そういうことはしない。誰かにコントロールされることなく自発的に進みます。

そして、この6番目はちょっとおもしろいですが、物や金、今までは何かどこかにあるものを取ってくる、お金を払って得る、みたいなことが多いと思います。

つまり「ゲット」するという感覚から、これからはモノを「クリエイト」する、創造する、自分で作る。どっかからもってくる、ゲットするのではなく、自分で作る、創造するという発想ですね。このクリエイトする、創造するプロセスにわくわくしたり、楽しかったり、達成感があったりということで、人々はどんどん巻き込まれていく。

TTスピリットの最後は、愚痴や恐れから実行へ。どうせそんなことやっても無理でしょ。一人でやったってムダじゃない。どうせみんな死ぬ時は一緒さ。そういう投げやりな態度ではなく、うまくいくかどうかわからないけど、まずやる。というのが、TTスピリット7です。

このトランジションタウンの動きは、イギリスが発祥ですが、ヨーロッパ全土、アメリカやカナダやオーストラリアや日本の各地にも広がっています。この考え方が短期間で広がっていった理由は、とてもメッセージが明るくて前向きだからです。ロブホプキンスさんが提唱者で、この写真は結構若いですけど、私とそんなに変わらない40代半ばくらいの方です。彼のメッセージは非常にポジティブでした。「私達が自らの想像力、イマジネーションを駆使して、創造的に、クリエイティブに考えるなら、石油のない未来は今よりもっといい社会になるかもしれない」と彼は言ったわけです。なんとなく、ピークオイル、地球温暖化というと、すごく深刻だし、すごく重大な問題ですよ。暗くて、この景気の悪い時に、もっとみじめな世の中を想像してしまうと思いますが、そうではない。私達がみんなでもクリエイティブに考えて協働していったら、石油に頼らない未来は今よりもっといい社会になるかもしれない。もっと自分のものは自分達で作れて、顔の見える地域で、いろんなものが豊かになり、そこに助け合いの精神が芽生えれば、子育てとか介護とかそういった問題にも繋がっていくかもしれない。現在のグローバルな社会というのは確かに便利ですよ。一年中食べたいものは何でも食べられます。でもひょっとしたらどこか遠くの国で早ばつが起こったり、戦争が起こったりしただけで物資が輸入できなくなるかもしれないし、いきなり値段が高騰するかもしれない。実は非常に脆弱なベースの上に成り立っていると言えますが、自分達地域がベースになった、地域で物を作っていくということを鍛えていったら、今より安心安全な豊かな世界になるのではないかと、というのがロブの提案でした。

トランジションタウンの進め方

トランジションタウンの進め方という分厚いガイドブックがあって、私はその一部を今紹介しているところですが、20年後に私達がトランジットにうまく成功して、持続可能な社会を実現したとしましょう、というところからはじまります。で、そこから逆算して行って私達はその20年後に何を食べているのか、何を着ているのかという風にバックキャストでプランをしていく。私

はもともと役所で長期計画を立てる仕事をしていました。市役所では目標の数値を決めて、そのために予算をとって、部署をここは何部、ここは何部という風に進めていきます。そういうやり方ではなく、できるところは全部虫食いでもいいからやれる人がやる、学校単位でも病院でも町内会でも何でもいいです。サークル単位でも何でもいいのです。できることをできる人がやる。

課題は食べ物だけじゃないです。エネルギーはどうなっているだろうか？あるいは交通はどうなっているだろうか？イギリスも田舎に行けば公共交通は決して充足していません。私の住んでいたところも、バスも電車も1時間に一本、二時間に1本しかないところでしたけれども、いきなり公共交通機関をつくってくれといってもそう簡単にはできませんよね。でも地域のカフェに行くと、そこには「私は朝8時半に出発して、9時に隣町に行きます。乗りたい方どうぞ」というようなカードが貼ってあって、車を乗り合わせたり、小さなミニバスを走らせたりということをしていました。まずできることをやってみる。いきなり地下鉄は造れないですけど、まず自転車に乗るということをやってみる。住宅もそうです。これは全部のイギリス国内ではないかもしれないですけども、どんな家がいちばん持続可能か、環境に負荷を与えないだろうか。そしてやっとここに来て、地域コミュニティというのができましたけれども、人々が集まることで少ない限られた資源やモノをシェアする、共有するということは、地域にもいい、環境にもいい、そして地球にもいい、解決の方法じゃないかなと思います。例えば車なんかがいい例ですよ。それから労働もそうです。農場の労働もその農家さんだけでなく、地域のいろんな人がやってくるというスタイルで行っているところがある。

持続可能な食と農については、単に自給自足します、自分達だけつくりますということではなく、地産地消、地域の生産者からものを買う、地域の生産を支えていくという発想だと思います。CSAというのはコミュニティサポータードアグリカルチャーと呼ばれていて、イギリス、アメリカで増えています。年間に農家が生産するのに必要な経費、例えば土地、施設、機械、機械を動かす燃料、人件費、そういう費用を全部会員さんの数で割って、春に全額前納し、その年に採れたものは全部その人達で分けます。私は長沼で活動をしており、そこで実はこの仕組みをやっているグループがあるのですが、80所帯の会員さんで一年間に食べる野菜は全部その農家さんがつくる。その代わり夏には夏の野菜しか配られてこないし、冬には冬の野菜、特に今時期ですと生のものはなくて、保管していた野菜とか味噌だとか加工品が多くなります。そういう仕組みで農家の初期投資を抑えて、リスクを押さえる。今年は寒かったから採れなかった、採れ過ぎたから安くなった、ということがないように、みんなでその農家の生活を支えるというやり方です。イギリスでは一つの村が全部この仕組みに入っているとこ

ろもありました。その仕組みに入っている人達は月に一回援農といって農家さんのお手伝いにもやってきます。ここのコミュニティは小さな10人くらいのコミュニティでしたけれども、年間に150人くらいのボランティアの若者達がやってきて、そこに滞在しながら農業体験をし、いろんな人と仲良くなるという仕組みですね。一緒に食べる、というのが非常にいいですよ。残念ながらイギリスの食事はおいしくないですけど。私が最後にはこりゃやっぱり無理だなと思ったのは、食文化が大きかった。日本の食文化は素晴らしいですよ。コンビニのお惣菜だって比べ物にならないくらいおいしいです。そしてみんなで一緒に食べるというのはもっと大事なことだなあと。単に栄養補給するとかカロリー補給するだけではない、もっと社会的・社会的な機会としても、「食」っていうのは大事だなと思います。

それから、持続可能な「住まい」。「住まい」っていうのは家、および暮らしに関わるいろんなエネルギーのことです。これは私がスコットランドで一ヶ月くらい滞在していたコミュニティの研修施設です。自然の再生可能な資源を使った建物、屋上には芝が植えてあったり、場所によっては水仙が咲いていたり、行者にんにくが植わっていたりして驚きましたけれども、断熱効果が高いんですね。そして、汚水の浄化もできるだけ下水施設や薬品に頼らない。これは400人の生活雑排水を植物の根で浄化しているところです。一番初めのタンクはものすごく臭くてブクブクの泡がヘドロのようになっているのですが、最後のタンクは透明です。もちろん飲めるほどきれいではないですけど、畑にまくとか、トイレで流すとかには全然問題ないですよ。それから、イギリスの場合は、再生可能なエネルギーとして風力に主に力をいれていましたが、それはそれぞれの国の自然条件によって、いろんなものを取り入れています。100%自給しているところもあります。ここは住民400人のコミュニティで電力の4割は風力発電でまかかっていました。もちろん今のように湯水のようにエネルギーを使いながら、それを再生エネルギーでまかなうというのはおそらく無理だと思いますが、要らないものを減らしていけばいい。要る電気を消す必要はないのです。みんなが楽しく幸せになるために使っている電気を消す必要はないのです。だけど、誰もいない部屋の電気は誰も幸せにしていないじゃないですか。そういう電気は消してもいいですよ。誰も幸せにしていないものをカットしただけでもかなり省エネできて、それを再生可能なエネルギーと組み合わせればもうちょっといい線行くのではないかなと思っています。私はエネルギーは全然専門家じゃないので、適当なことを言っていますけど。

それから持続可能な「経済」、これも大事です。どんなに環境によくてもCO₂が減っても、食べていけないというのはやっぱり不安ですよ。その時に、集まって住む、地域で協働することの良さは、少ないものをみんなで分けることで、

経済的にもそんなにお金がたくさん無くても豊かな生活が実現するという事です。車がいい例です。今や1人1台の車が常識になりつつありますが、毎日乗らない人だったら、3人で1台、5人で1台でもいいですよ。最近、若い人達はこういうことをするようです。このコミュニティは400人しか住民はいませんが、コミュニティバスを地域の人にも提供しています。それから、集まって住む地域で協働することの良さは、「子育て」というところで大きいと思います。特にヨーロッパだと田舎に住めば住むほど隣の家までもものすごく遠くて、車で送り迎えしなきゃいけない。北海道でもそういう地域はあると思いますけど、子ども達が日常的に安心して遊べる場所、大人達の見守りの目があるということがとても重要ではないかと思います。そこには世代間のいろんな交流が自然と起こってくると思うのです。

トランジションのガイドブックを読んでいくといろんなプログラムがありますが、その一つがお年寄りから学ぶということです。50年前、60年前、今のよう便利な石油製品やグローバルな経済が無かった頃は、おのずと持続可能な生活スタイルだったのですよね。そのころの技術っていうのは、これからトランジションしていこうというときに役に立つ技術がたくさんあるはず。みんな昔の状態にそのまま再現して戻りましょうとっているわけではなく、今の社会環境とか自然環境に合わせてながら、けど昔持っていた技術を見直していくというのは大変重要なことだと思います。近頃は自転車のパンクだって自分で直さない、自転車屋さんに行ってか、下手したらその辺に捨ててありますよね。けど、昔だったら当然直していましたよね。そういう些細なことでも無駄を出さない工夫をする時に、一人一人無理をするのではなく、お隣の人に教えてもらう、おじいちゃんおばあちゃんに教えてもらう、というようなことをやっていくとCO2は結果的に減るし、そこで豊かな人間関係が生まれるというのが大事だと思います。これはルースという町のパブで、夜になるとゾロゾロと老いも若きもこのパブで飲んだり食べたりするのですが、ここに貼ってあるカードを引っ張って見ますと、アクセプティドヒア、ここでも使えます、と書いてあり、この町内でしか使えない地域通貨がありました。八百屋さんでも本屋さんでもこういうパブでも使える、ただしこの町でしか使えない通貨です。他所に持って行ったらただの紙切れなのです。しかも、ある大きなスーパーがあって、そこが私達も参加させて欲しいと言ったところ、地域の運営チームはNOだと。そういう大規模なスーパーの運営資金は海外からやってきて、収益も海外にいつてしまう。そうではなくて、地域の生産者を支える、地域の小さな店舗を支えるためにやっているのです、と。どのような方法かわからないのですが、お店の店主が集まった地域通貨を銀行に持っていくとイギリスポンドと換えてくれるのです。それは、日本でやったらたぶん違法じゃないかなと思うので、仕組みとしてはどうやって実現しているのか

わからないのですが、そういうものもありました。

実際にこのような貨幣を作らずに労働をエクステンジする、労働を交換する。例えば、私は犬の散歩ができますとか、私はガーデンの草むしりをやりますとか、車で送り迎えをしますとか。私は裁縫が苦手なのでジーンズの裾上げをしてもらう代わりに、日本語を教えますとか。後は海苔巻きかなんかをつくったりもしたかな。特に商売になるような技術じゃなくていいのです。相手が欲しいと言ってくればいいのです。そういったものを交換しながらいろんな人と仲良くなる。これも人間関係をつくっていく一つだと思います。

コミュニティガーデンなど、日本の事例

さて、散々イギリスの例を見ていただきましたが、これは外国の話ではないか、と思われてしまっても困るので、最後にトランジションのためのアクションプランで、こんなこともできる、あんなこともできる、というのを国内の例で見ていただきたいと思います。先ほどもお話したように、今出来ること、今所属している団体、今持っている技術や知恵やネットワーク、そういうものを使って始められることでいいのです。新しく大きな機械を買うとか、新しく協議会を作らなければいけないとなると、そこで嫌になってしまいますので、今出来ることをやるというのが大事です。その時にちょっと参考になるかもしれないということで、私が取組んでいる札幌のコミュニティガーデンをご紹介します。これは、公園に隣接している敷地を借りてやっているガーデンです。大学生、保育園児、町内会、知的障がい者の小規模作業所の人達がやってきます。市民農園だと自分の食べ物を自分の区画で作って持って帰るじゃないですか。ですがこれは、みんなの区画をみんなで作って、もちろん野菜や実りは大きなプレゼントなのですけれども、作るプロセスでいろんな世代の人達が交流することを目的にしています。これは、北海道工業大学の大学生が地域の町内会長さんに「腰つきがなっとらん」と言われながらも、芋の土寄せをしているところです。これは高齢者のデイサービス、通所とショートステイの方が来ているのですが、そこに児童館の子ども達が定期的にやってきて一緒に農作業をするのです。要介護で普段はなかなか外にも出ることがないというみなさんも、子ども達がくるのをすごく楽しみにしていて、あるいは農作業することでとても懐かしい気持ちになる、とても元気になるとおっしゃる方も何人もいらっしゃいます。これは学校の跡地をつかったファームで、近所の人達・子ども達が自然発生的に集まっているところです。交流だけではなく、高齢者や障がい者が社会参加する社会適応の一つの訓練にも繋がっていると思います。こちらも小規模作業所ですけど、彼らは園芸の技術を磨いて、近隣の公園の清掃や花壇をつくる委託業務を通じて仕事もしています。これも知的障がい者の施設ですけど、これまで離れたところにあったせいもあって、ご近所の方が来る機会は減多になかった。だけど、ここに花と野菜を組み合わせた綺麗

なガーデンを造ったことで、ご近所の人達が時々散歩に寄って写真をとったり絵を描いたり、来年はこの一画を小学校のグループが借りるということもあります。なかなか交流といっても、近頃は知らない人に声をかけるのは難しい。障がい者や高齢者に何を話していいかわからないという人も多いと思いますが、農作業を通じてというのは非常にコミュニケーションが楽になるというのがあります。

それから、農作業だけじゃありません。「食」。先ほど言いました、日本の食文化は素晴らしい、私は世界一だと思うのですが、食を通じていろんな学びがあったり交流があったりします。これは先ほどお見せした公園の隣でやっているところですが、収穫祭には実に90人くらいの人が集まって焼き野菜をやったり豚汁を作ったりしました。大した収穫量はないのですが、それは問題じゃないのです。芋も小さかったりするのですが、それは問題じゃないのです。みんなで作るのが楽しいのです。これはさっきの学校の敷地を使ったところにコミュニティレストランをオープンして、畑で作った野菜をコミュニティレストランで調理して出しています。実は私も驚いたのですが、ここに来る子ども達は家に夕方帰ったらマクドナルドのハンバーガーが2つ置いてあって夜1個食べて朝1個食べるって言うのです。ちょっとショックでしたけど、お弁当もコンビニのお弁当をそのまま持って来るのです。そういう子ども達がまず野菜を自分達でつくってみる、皆で一緒に食べてみる、自分で作ったきゅうりは味が違うって言うのです。それも一人ではなく、異年齢の集団の中でそういうことをできるチャンスがあるのは大きいと思いました。右下は、子ども達がクリスマスケーキと一緒に作ったところで、左上は先日やった味噌作りですね。味噌をつくるだけの大豆の収量は無かったのですが、手前味噌作りという教室をやりました。

今まで見ていただいたのは札幌で、わたしが昨年やった例なのですが、これに関連して道外の事例をいくつか調査してまいりましたので、それをご紹介します。こちらは千葉県習志野市にあるコミュニティスクールです。公立の学校ですが、だんだん生徒数が少なくなってきて、一階が全部空いている。2階以上は教室として機能しているのですけれど。1階の空いている部分を全部開放して、地域の人達がいろんなサークル活動をしている。書道の教室もある、お料理の教室もある、囲碁将棋のクラブもある、演劇もダンスもある、そういう人達が集まるのです。非常にオープンで、学校の鍵もその人達が管理しているのです。入口のところにいくと、鍵が開いていないときはこの人に連絡してくださいって10人くらいの名前と住所と電話番号が書いてあって、その人達が鍵を持っている、というくらいのオープンさなのです。運営している事務局長の方と話したところ、子どもをめぐる学校を取り巻く環境って言うのは本当に年々悪くなっていて、池田小学校の事件があったときにもこの地域で話し合いをしたそうです。自分達の地域の子どものをどうやって護るか。閉じて護るか、開いて護るか、どっちかしか

ないので、私達は開いて護るのだということを決意されたとおっしゃっていました。やってくる地域の人達は、必ずしも自分の子どもが通っているわけではないのです。昔通っていたとか、いとこの子が通っているとかそういう感じなのですけれども、地域の大人達が自分のサークルの活動だけではなくて、学校の施設と一緒に作ってくれたりするわけです。動物の飼育小屋だったり、ビオトープといって魚とか虫が生息する環境を地域の大人達が子どもと一緒に作ったり。田んぼもありますが、小学校5年生の授業の中でやる田植えや稲刈りの授業に、地域の大人達が参加しているということでした。今日は後半のセミナーで子育ての話聞かれると思うのですけれども、お父さん達はなかなか学校に寄りづらい、自分が学校にいるイメージをもてない。その時に、モノづくりというのは非常に良いプログラムで、大工をちょっとやってみるとか、ベンチ作るとかバス停まで作っていましたけれども、まあ本当にいろんなものをつくる。それで学校の先生には負担をかけない。学校の先生には負担にならずに学校の施設がどんどん増えていってしかもその管理までやってくれる。鍵も自分達で持っているから勝手に自主運営するということで、これはよほどの信頼関係がないとできないので、一朝一夕には無理だなと思いますが、そういう学校をつくることで、学校のためではない、学校の運営のためではなく、学校中心に地域がつくられていく良い事例だなという風に思いました。

2つ目にお見せするのは、農家さんの取組みですけれど、一軒の農家が1丁2反、北海道で言えば農業者の資格を取るのもどうかな、難しいかなというくらいの小さな面積ですが、東京の練馬区の住宅街で、周りはマンションとか住宅がびっしりあるところで、今後どうやって農業を経営していくかというときに、体験農園というものを考案されました。1丁2反のうちの3分の1は一般の区民の方がやってきて学校形式で畑の教室をやるそうです。さっきの市民農園とは違って好きなものを好きな時につくるのではなく、教室のある時に来て、栽培していくのです。1年間の受講料が4万3千円と言っていましたから、結構な値段だと思うのですが、その内1万2千円は区が補助するそうです。そして、区が簡易トイレなどいろんな施設をつくったり、広報を担当して、運営は全てその農家さんがやる。非常に良い協働事例だと思います。自分達はそれまでキャベツを作っていたのですけれど、ただキャベツを作って出荷するときよりも、作業は市民がやってくれますし、1区画4万3千円で、200区画分、毎年必ず収入になるので、収入としても安定している。地域の人もここで作るようになると必ずここで買ってくれますから。1丁2反で栽培された野菜は全て半径5キロ以内で消費しているそうです。右は親子大根教室。練馬大根って有名ですよ。練馬大根教室といって親子で漬物をつくるという教室をやったり、あるいは学校単位で小学生がやってきて、ほうれん草の種を蒔いたりします。もちろん手入れするのはほと

んど農家ですけど、それを給食で食べる。朝収穫したほうれん草をその日の給食で食べられるんだそうです。そういう学校の授業の中でもやる。あるいは精神障がいの人達が、作業をすることで、職業訓練みたいなこともなさっているそうです。動物も飼っているみたいですけど、動物を収益に、ということではなく、子ども達の農育、食育の一環でやっているそうです。左側はレストランですけど、自分のところで作った地域の野菜をお出しするレストランで、予約がないと入れないくらい。私も予約がなかったので食べられなかったです。

最後ですが、これは賃貸の木造アパートで、こんなアパートでもコミュニティガーデンができるという例です。4世帯入っていますが、庭が全部くっついています。こういう作り方をしますと、結構トラブルの元かなと思うのですが、4世帯で一緒に、もちろんデザインガーデンの専門家が入って、ガーデニングの教室をやり、みんなで作業する機会をもちながら一緒に食べたり飲んだりする。賃貸のアパートでなかなかこういうことをするのは難しいと思うのです。隣に誰が住んでいるかもわからないみたいなことが多いですけれども、このガーデンを通じてご近所の人ともいい関係ができる。これエコアパートって名前が付いているくらいで、材料の木材は全て東京産の木材、断熱効果が非常に高いので、暑い東京でも夏でもほとんどクーラーがいらぬ。雨水をタンクに集めたりとか、使った電気やガスがわかるようになっており、自然にちょっと使いすぎたなという風に意識できるようにもなっています。北海道は土地がたくさんありますから、庭付きの住宅なんて珍しくないし、東京にいたらちょっと庭があるというだけで憧れなのかもしれないですけれども、大事なのは土地がある、スペースがあるということではなくて、そこを通じて皆で交流していくという仕掛けの部分だと思うのです。ここの玄関先には東屋があって、ゴーヤが実って、夏にはゴーヤパーティーをするのですが、そこで必ずいろんな会話が生まれる。私がたまたま行った時にはピザをみんなで焼いていて、どうぞ食べてくださいと招かれました。隣の子どもが泣いてもうるさいと思うより、大丈夫かな、どうしたのかなと思うように、心配になるとおっしゃっていました。それで、ピザを焼いている大家さんも、東京の賃貸マンションだとトラブルも多くて、出入りも多いのだけれども、コストかかって家賃が高い分、良い住民が長く住んで、大事に使ってくれるからとても良いとおっしゃっていました。

最後に

条例も大事だし、施設も大事だし、いろんな技術、テクノロジーも大事だと思いますが、もっと大事なものは人々の意識です。みんなが繋がっていかうとか、得意なものをお互いに交換しようというのがもうちょっと進むと、いろんな物とかお金とか制度というものも活かされていくのではないかと。それが市民協働のまちづくりというところに最後は行き着くのではないかとと思うのです。地球環境問題

とか CO2 の問題はもちろん大きいですが、そういう問題はこのような協働のまちが実現したあかつきに、結果的にそういった負荷の少ないまちになっていくのではないかな、と私は考えています。今日はいろいろと取りとめのないお話をしましたが、何かみなさんの今後のまちづくりのヒントにさせていただけたらな、と思います。どうもありがとうございました。